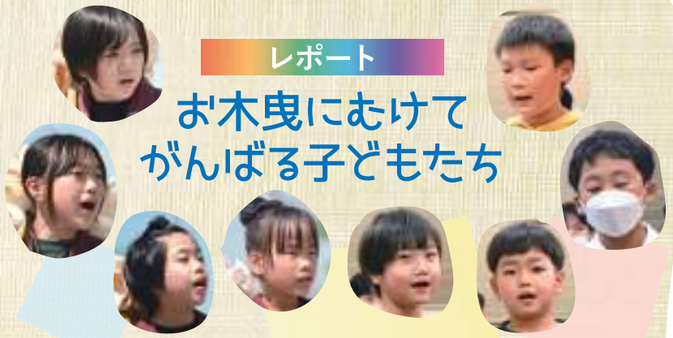


レポート

お木曳にむけてがんばる子どもたち

船江神習組【ふなえしんしゅうぐみ】

船江上社に週に一度集まり、地域の氏神さんで木遣り練習。最初は声出しからです。次は囃子をみんなで一斉に。段々と喉を慣らし、木遣りをソロで唄う頃には心地よく力強く息の長い声が境内に響きます。指導する家城一誌さんは前回遷宮行事が終わった後もずっと練習を続けています。「塾や習い事で忙しいですが、やりたいと言う子が途絶えず、親御さんも熱心です」。子どもたちは「本番は緊張するけど練習は楽しい」と、各地の催しに参加し、人前で披露して経験を重ねています。

今一色奉曳団【いまいしきほうえいだん】

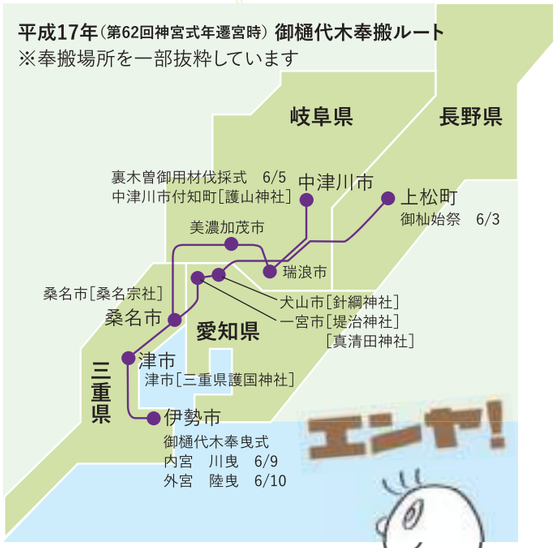
令和5年11月、奉曳団が立ち上がったことをきっかけに、子どもたちの「小木遣」の練習が始まりました。通うのは小学1年生から4年生までの4人。木遣り師匠の大西一典さんは小木遣も経験したベテランです。今一色の木遣りの節回しは独特で、口伝で受け継がれてきました。そんな難しい節を大きな声で元気いっぱい歌詞の一言一言を忠実に、みんなで集中して唄います。その力強い唄声に区長さんはじめ役員も、合いの手で励ましています。

御樋代木奉搬 各地から伊勢へと

長野県上松町・岐阜県中津川市の御杣山から伐り出された御樋代木は、伊勢へと運ばれます。

御樋代木の奉搬ルートとなる長野、岐阜、愛知、三重の各地の沿道ではお出迎えのお祭りが盛大に繰り広げられます。その尊い思いを引き継いで、伊勢では御樋代木奉曳式が行われます。

平成17年（第62回神宮式年遷宮時）御樋代木奉搬ルート
※奉搬場所を一部抜粋しています



瑞浪市内を奉搬（平成17年6月7日）

真清田神社【一宮市】（平成17年6月7日）

堤治神社【一宮市】（平成17年6月7日）

御樋代木（御神木）への思い【長野県上松町　岐阜県中津川市】

御杣始祭（平成17年6月3日）

【長野県上松町（木曽）】

神宮式年遷宮で、御神体をお納めする「御樋代」となる御神木を伐り出すお祭りが御杣始祭です。前回は平成17年6月3日に、長野県上松町で斎行されました。御杣山にて、厳しい条件を満たした左右に並ぶ二本の檜が選ばれ、杣夫の声が響く中「三ツ緒伐り」の作法で伐り出しました。

中津川市／裏木曽三ツ伐り保存会。左から熊田貴則さん、青山裕紀さん、杣頭の鈴木卓也さん

上松町／三ツ紐伐り保存会・伊勢神宮木曽奉賛会。左から池田聡寿さん、杣頭の橋本光男さん、曽我俊郎さん

木曽の山で、木を伐り出すことを“寝かす”といいます。「斧で木を伐るには風の動きや枝の入り具合、木がどちらに寝たがっているかを見極めないといけません。自然との対話が大切です」と杣頭の橋本さん。そんな経験値に加えて、山への畏敬の念を忘れずに、“寝かす”技術を後世へと伝えています。「この祭りは前回同様、地元の中学生全員にぜひ見てもらいたいですね。10年後に働いている人たちですから」と保存会の曽我さんが思い返せば、「参列した伊勢の人々が祭りに涙してくれていたことが、御神木を送り出す側からすれば本当に感慨深いものでした」と同会の池田さん。御樋代木奉搬を上松から伊勢まで追いかけた池田さんは、沿道で御神木に手を合わせて見守る人々の姿にも感銘を受けたそうです。

裏木曽御用材伐採式　鳥総（とぶさ）立て（平成17年6月5日）

工程によって使い分けられる斧

裏木曽国有林。御神木の切り株

木曽・裏木曽の御杣山では、伐採された切り株に梢を立て、木霊に対し感謝の意を表す鳥総立ての儀式が行われてきました。大自然の森の恵みに感謝し、この先においてもこの恵みが受け継がれていく事を、地域の人々は祈っています。

【岐阜県中津川市（裏木曽）】

上松町の2日後、平成17年6月5日に、岐阜県中津川市では裏木曽御用材伐採式が行われ、内宮、外宮の二本の御樋代木が伐り出されました。

「三ツ緒伐り」を受け継ぐ現在の裏木曽三ツ伐り保存会のメンバーは、平成29年の斧入式に合わせて練習を開始しました。斧入式は神宮式年遷宮で使われる御用材の伐採を始める祭事。同年秋に、樹齢約100年の檜1本を伐採。「斧で伐るのは普段できない特別なこと。木によって成長は違うし、同じようにはいきません。その加減を体が覚えるよう、経験こそが大事。木曽の方や伊勢神宮の営林部とも合同で練習しています」と杣頭を務める鈴木さん。「経験者からの指導や中津川市との連携もあり、環境は恵まれています」と保存会の熊田さんは協力体制について話します。さまざまな関係者と協力し、斧による伐倒の機会を設け、森林文化や伝統技法を継承することで、伊勢への思いを深めています。

お木曳行事豆ちしき 3

御樋代木【みひしろぎ】

御樋代とは、御神体を納める器のことです。その御用材となる御樋代木は御神木とも称され、山仕事に従事する人々からは神聖視されてきました。御樋代木は樹齢300年以上の檜。上松や中津川の人々が何代にもわたり、大切に守ってきました。

長野県、岐阜県から奉搬された御樋代木を、両宮域内の五丈殿前に曳き入れる儀式が御樋代木奉曳式です。内宮では五十鈴川を背中に「太一」の文字が染め抜かれた黒いはっぴを着た曳き手たちにより神域へ。風日祈宮橋のたもとから曳き上げると、神宮式年造営庁の職員たちにより五丈殿に安置されます。外宮では奉曳車のワン鳴りを響かせ、エンヤの掛け声勇ましく、はっぴ姿の町衆によって、神域へと運び入れます。

［職場訪問］

IXホールディングス 代表取締役 浜田吉司さん

初穂曳には毎年、陸曳も川曳にも参加。「我が社の商品はお煎餅とお酒です。稲作の聖地である伊勢の地で、お祭りに貢献するのは至極当然のことと考えています」と浜田吉司社長。豊穣を思わせる柿渋色の揃いのはっぴで、にぎやかにご奉仕します。

また、お白石持行事には社を挙げて取り組みました。「御遷宮でまちも生まれ変わります。伊勢の企業にとってありがたい仕組みでしょう。お木曳などの伝統行事を次へとつないでいくのは伊勢の企業の使命です」。伊勢の未来を見据え、職域で支えています。